四

夕刻、笹塚孫一と磐音は、南町奉行所が密かに借り受けた下渋谷村の庄屋利右衛門方の離れ屋に移った。

その離れから栗林越しに高馬道平たちの暮らす百姓家が望めた。その上、離れ家の出入りが高馬たちから見られることなくできた。

南奉行所の出張り所というわけだ。

離れには八畳二間のほかに囲炉裏が切られた板の間があった。

そこへ年番方与力の笹塚孫一を頭分とした歌垣彦兵衛、木下一朗太ら同心、小者たち、それに品川宿の御用聞き、八つ山の数吉と手下たちが泊まりこむことになった。

さらに近くの百姓家から二人ばかり女を雇ってきて、男たちの飯の用意などをさせることにしていた。

笹塚は、囲炉裏端に座を占めた。かたわらに磐音が座らされた。

「正月早々、広尾原くんだりに出張るもの町方ならではの務めだ。坂崎、そなたもわしと知り合いになったのを悪縁と諦めろ」

「笹塚様、今度の一件ばかりは、いかな笹塚様のお出張りでも南町に大金は見込めませぬな」

磐音は笹塚の軽口に合わせるように訊いてみた。

笹塚は小さな体に清濁併せ飲む度量を持っていた。江戸で暗躍する悪人どもを捕まえると、笹塚はその者たちが盗み溜めた金子のうち、持ち主の不分明な金や返す当てのない金を公にはせず、奉行所の活動探索費に繰り入れていた。だからこそ、今宵のような機動力を発揮できたのだ。

裏の戸が開いて、すっかり百姓風に身を窶した小者が戻ってきた。

「笹塚様、増上寺別院には未だ鈴木香志郎が戻った様子はございませぬ」

頷いた大頭の与力が、

「必ず頭分の町人から高馬らにつなぎが入る。そいつを見逃すでない」

と言い放ち、

「坂崎、まあ、そなたは、出番が参ったときに働いてくればよい。酒でも飲んでおれ」

と機嫌よく言った。

大頭の下の広い額の下には、くちゃくちゃと配置された目、鼻、口があった。それがふいに崩れたように笑い。

「坂崎」

と磐音にだけ聞こえる声で囁いた。

「さっきののなたの指摘じゃがな。高力家の用人どのにちらりと鈴木香志郎とのことを知らせておいた。そのうち、もみ消し料を持ってくるわ。まあ、まず二百や三百は堅かろう」

と不敵な笑みとともに吐き捨てた。

磐音は正月三日から四日未明にかけて、南町奉行所の役人たちと下渋谷村の庄屋の離れで過ごした。

事件が動いたのは四日の昼下がりだ。

高馬らが巣食う百姓家にお店の手代風の男がやってきて四半刻もいた後、また古川沿いに東に下っていった。むろん八つ山の数吉と手先たちが巧妙にもその男をつけていった。さらに五つ時分に高馬道平、桂間某、磯崎某の三人が足拵えも十分に、借り受けていた百姓家を出ていった。

木下一朗太らが尾行に入った。

庄屋の離れに残ったのは笹塚と磐音だけだ。

「今宵、仕事をするかどうか、品川の親分が知らせてこよう」

笹塚は悠然と構えていたが、

「奴らの隠れ家を覗いてみるか」

と磐音を誘い、栗林を横切って高馬らの潜む百姓家を訪ねた。

二人はぐるりと家の周りを回って、残っている者がいないかどうか念のため調べた。いるふうはない。

笹塚が用意していた火種を提灯に灯した。

磐音が表戸を引くとがたぴしと開いた。

屋内には囲炉裏の火が薄く燃え残り、人のいた気配が漂っていた。酒と煙草と食べ物の匂いが戸口から吹き込む風にざわついて、磐音らの鼻腔を襲った。

囲炉裏端には徳利などが転がり、奥の間に夜具が覗いた。

笹塚は部屋に上がって高馬らの持ち物を探していたが、

「金目のものはなにものこされておらぬぞ。今宵のしごとを終えたら、どこぞに高飛びする気のようだ」

と推測した。

となれば、なんとして今宵の押し入り先を突き止めねばならいことになる。

二人が庄屋の離れに戻ると八つ山の親分の手先が待っていた。

「隠れ家を突き止めたか」

笹塚の問に手先が、

「へえ」

と頭を提げた。

「案内せえ」

手先に提灯を持たせ、笹塚と磐音がその後に従った。二人が肩を並べて歩くと頭一つも背丈が違うし、歩幅も違う。

それでも笹塚はちょこちょこと足を小刻みに動かして、磐音の足の速さに合わせた。

「笹塚様、頭分の隠れ家は、この川の下流、金杉河口の芝金杉裏町にございました」

「ほう、あそこならば、江戸の海に逃れるのも、大川沿いに神田川を遡って市谷御門に舟を着けるのも簡単だな」

「へえ、うちの親分の見立てでは、足の不自由な頭分はまずおっとりの百兵衛と見て違いなかろうと申しております」

「数吉は見たのか」

「へえ、夕刻前、床屋から戻った頭を見てございます」

「今宵、仕事をする模様か」

「頭が前に床屋に行って髭を当たらせ、髷を結い直してもらったのは、大晦日のことだったそうです。どうやら、おっとりには仕事前に身なりを整える癖がございますようで。となると今宵、どこぞに押し込む算段かと親分の推量にございます」

「よしよし、おっとりの百兵衛も年貢の納め時じゃ」